

NEWS LETTER



2024年4月発行 一般社団法人 日本口腔衛生学会
ニュースレター第12号

事務局 〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 (一財) 口腔保健協会内
TEL: 03-3947-8891 FAX: 03-3947-8341

E-mail: gakkai37@kokuhoken.or.jp HP: <http://www.kokuhoken.or.jp/jsdh/>

発行人 三宅達郎 編集 広報委員会



CONTENTS

- 第73回日本口腔衛生学会・学術大会のご案内
その2 大会企画案内

- 広報委員会より(編集後記)

第73回

日本口腔衛生学会・学術大会のご案内 その2

大会企画案内

【大会長】岸 光男

(岩手医科大学歯学部口腔医学講座予防歯科学分野)



日本口腔衛生学会会員の皆様。前号に引き続き、第73回学術大会についてご案内申し上げます。ご承知のように今回の大会テーマは「健康の伸びしろ」です。それに合わせて大会企画の講演とシンポジウムを用意しましたのでそれらをご紹介しますと思います。まず11日土曜日の午後は、「シェイクスピアが描く病と健康」という特別講演を演劇評論家の松岡和子先生にお願いしています。この講演、実はその後のシンポジウム「健康の測り方」と「物語」というキーワードで繋がっています。近年、臨床や疫学研究の重要なアウトカムとなっている主観的健康状態は、おそらく個人の健康に関する物語と深く関わっていると考えています。主観的健康状態は多くの場合、質問表により評価されます。代表的な口腔関連 QOL 質問表の開発に携わった内藤先生にお願いして、物語のような主観的健康状態を“測る”ことの困難さに取り組んでこられた先生方にお声がけいただきました。

加えてこのシンポジウムでは、京都大学健康情報学分野の中山先生に、シンポジウムのための基調講演をお願いしています。中山先生は内藤先生の師匠筋であり、シンポジウムにも参加して下さることになっています。座長をお願いした三宅理事長も含め、丁々発止の議論必至と思われます。12日日曜日の午前中は「マイクロバイオーム研究の口腔保健への活用の伸びしろ」と題したシンポジウムです。コーディネータの竹下先生が研究されているマイクロバイオームはまさにより良い口腔内微生物叢を構築する「健口の伸びしろ」の鍵だと思います。これも私から是非にとお願いしたものです。シンポジウムタイトルは、私からのプレッシャー(かけた覚えはないのですが)からか、大会テーマに寄せて「伸びしろ」という言葉を使ってくれています。そんなに無理しなくてもよかったのにとしつつ、タイトルをありがたく眺めております。12日の午後はシンポジウム「東日本大震災からの復興の伸びしろ」です。「復興」ではなく「復興」としていることにお気づきでしょうか。東日本大震災は13年前の出来事ですが、岩手県では2011年を含む10年間、2020年まで被災地の継続的な健康調査を行いました。復興していく町とともに打ちのめされた心身が回復していく状態を見つめてきました。口腔保健に関してはデータの多さに埋もれ、十分な分析ができていない状況ですが、大規模災害時に起きうることを皆さんに少しでも伝え残して行けたらと思い、東北大学の小関先生に座長の労をお願いしました。もちろん、大会企画以外の委員会企画、一般企画のシンポジウムも興味深いテーマで数多く用意されています。この後にそれぞれの座長がシンポジウムの紹介文を寄稿していますので、そちらをご覧くださいだと思います。

大会まであとわずかです。みなさま、5月の盛岡でお目にかかりましょう。

第73回

日本口腔衛生学会・学術大会シンポジウム

大会企画シンポジウム 1

健康の測り方

座長：三宅達郎（大阪歯科大学口腔衛生学講座）



「測定しなければ、改善がない」という言葉があります。現状測れないものを無理やり測れたようにすることはナンセンスですが、測りづらいものでも測れるように努力し、物事の改善につなげていくことは極めて重要です。しかし、健康を測ることは大変な作業で、そもそも健康とは何かから議論しなければなりません。

本シンポジウムでは、まず中山健夫先生から、「“Health”の向こうにあるもの：3つの“LIFE”を考える」と題して、本学会にとって極めて重要な概念である「健康」についてお話をいただきます。その後、鈴嶋先生からは患者報告アウトカム（PRO）による健康評価とくに「包括的尺度」について、平成人先生からは医療におけるQOL/PRO評価の意義と実際について、白岩 健先生からは、医療経済評価によく用いられる選好に基づく尺度ならびにそのスコアによって算出されるQALY（質調整生存年）について、内藤真理子先生からは口腔の健康における主観的評価について、それぞれ現在の健康の測り方についてご講演いただきます。そして、最後の総合討論では、中山健夫先生にも加わっていただき、「3つのLIFE」を考慮した「Health」のものさしについても思いを馳せたいと思います。

このシンポジウムを通じて、一人でも多くの方々に、「健康を測る」というチャレンジを研究、臨床、行政などの現場で行っていただきたいと願っています。多くの方々のご参加をお待ちしております。

大会企画シンポジウム 2

マイクロバイーム研究の口腔保健への活用の伸びしろ

座長：竹下 徹（九州大学大学院歯学研究院口腔予防医学分野）

久保庭雅恵（大阪大学大学院歯学研究科口腔感染制御学系部門予防歯科学講座）



口腔には膨大な数の常在微生物が複雑な生態系を構築して生息しています。この微生物叢におけるバランス異常は歯科の二大疾患であるう蝕と歯周病はもちろん、呼吸器や消化器をはじめとするさまざまな全身状態にも影響を及ぼしていることが明らかになってきています。したがって口腔常在微生物叢の構造と動態を正確に理解しその制御が可能になれば、口腔および全身の健康増進への大きな貢献につながっていくことが期待できます。

このシンポジウムでは最新のマイクロバイーム解析技術により明らかになってきた口腔常在微生物叢の全体像、そのなかで起こる代謝物等を介した細菌間相互作用の健康への影響、さらに細菌とウイルスの間の相互作用と健康への関わり、細菌が分泌するバクテリオシンや細菌に感染するバクテリオファージ等の微生物叢制御への活用といった口腔微生物叢に関する最新の知見について演者の先生方にご紹介いただきます。本シンポジウムが口腔常在微生物叢をターゲットとした新たな口腔保健アプローチの可能性について議論する機会となればと考えています。

大会企画シンポジウム 3

東日本大震災からの復康の伸びしろ

座長：小関健由（東北大学大学院歯学研究科・地域共生社会歯学講座予防歯科学分野）



今年の東北の冬は暖かく、春めいた海風が心地よく青空を満たしています。美しい東北の自然は、しかしながら13年前に未曾有の災害として、私達に牙を剥いて襲いかかりました。この気まぐれな自然の怒気は、今年の正月も含めて、いつどこで噴出するか判らなく、人間の構築した世界の脆さを感じます。

盛岡の地で開催される本学術大会の最後のシンポジウムは、「東日本大震災からの復康の伸びしろ」です。朴訥で無口で忍耐強い東北人の「語り継ぐ・忘れない」経験を改めて振り返り、皆さんの心に大規模災害の意味を問いかけたと思います。

始めに、医師である岩手県予防医学協会の坂田清美先生から、被災地1万人コホートであるRIAS Studyから得られた健康の動態について、次に保健師である岩手保健医療大学の鈴木るり子先生から、全戸家庭訪問やRIAS Studyから見えた「復興にはまず健康を」について、3番目の登壇は本学術大会の大会長である岩手医科大学の岸光男先生から、被災地住民の口腔保健10年コホート研究の成果をお聞きします。

今でも思い出す、個々人の人間性とプロフェッショナリズムを問われたあの日、あの瞬間。3名のシンポジストの岩手県を中心とした震災後の取り組みを聞きながら、皆さんとそれぞれの社会に対する責任と行動を考えたいと思います。

委員会企画シンポジウム 1

最近の小児のフッ化物応用の疑問を解く

座長：田口円裕（東京歯科大学歯科医療政策学）

廣瀬晃子（朝日大学保健医療学部総合医科学講座）



フッ化物応用によるう蝕予防は歴史的に長い疫学研究の背景をもち、生命科学の中でも実証されてきた疾病予防法です。しかし、科学の進展や時代の移り変わりに伴い、フッ化物応用をめぐる状況も変化しており、さまざまな見解が出てきました。それに伴い、近年ではフッ化物の安全性や毒性などネガティブな意見を耳にし、使用を心配する市民や歯科医療従事者も出てきています。そこでこのシンポジウムでは、フッ化物応用に対する現在の課題と今後の展開を検討していきたいと考えました。今回はう蝕予防法として最も効果を期待される小児を対象とし、最近話題となったテーマについて5名の先生方に御登壇いただき、疑問を解いていこうと思います。

それぞれが最近歯科の現場で話題となった内容です。先生方には専門の見地からわかりやすく説明いただき、フッ化物応用に対して懸念や疑問を持っている人々の問題点を解決する一助となれば幸いです。

委員会企画シンポジウム 2

Society5.0 時代を担う！令和の口腔保健教育のあり方

座長：尾崎哲則（日本大学歯学部）

野口有紀（静岡県立大学短期大学部）



Society 5.0 は、狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）に続く、次の社会のことです。Society 5.0 とは、IoT（Internet of Things）で人とモノがネットを介してつながり、人工知能（AI）などによって新しい価値やサービスが生み出され、人びとを豊かにする社会をさしています。現在、わが国では社会経済的な格差や地域間での格差が存在しており、これらの格差を是正する手段の一つとして、デジタル技術

を活用した教育のあり方が問われています。また、Society 5.0 時代では、自ら関心を広げ自発的に学ぶ、多様性を重視した自律的な学びが求められています。Society 5.0 時代の学びに関連して、個別最適化された学び、スタディログ、STEAM 教育、e ポートフォリオ、オンライン授業など新しいキーワードが出てきています。3 人のシンポジストから、Society 5.0 時代を見据えた取り組みについてご講演いただきます。人生 100 年時代に、幼児から社会人までのすべての人たちの多様性を重視した自律的な学びが実現できるよう、皆さんと議論を進めていく予定です。本シンポジウムが、Society 5.0 時代での口腔保健に携わる人材育成に向けて動き出すきっかけとなっていただければ幸いです。

委員会企画シンポジウム 3

健康寿命延伸のための口腔保健 —海外と日本の知見や取り組み—

座長：小川祐司（国際交流委員会／新潟大学大学院医歯学総合研究科予防歯科学分野）



第 74 回 WHO 総会議決書を踏まえた口腔衛生学会の提言では、口腔保健をユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）と非感染性疾患（NCDs）対策の一環と位置付け、より良い口腔保健の達成とともに、人々の幸福に貢献するシステムづくりに向けた口腔保健を広く内外に進める必要性を訴えている。その中で、高齢化に対する口腔保健は諸外国において大きな課題であり、国際交流委員会ではアジア高齢者口腔保健コンソシアムのもと、高齢者口腔保健研究や活動の支援を進めている。

本年度は、「健康寿命延伸のための口腔保健 —海外と日本の知見や取り組み—」と題したシンポジウムを企画し、米国、ニュージーランド、香港、日本での取り組み事例の共有を行う。ハーバード大学・永井成美先生には、日本のナショナルデータベースをもとに口腔健康と認知症に関する国際研究について、オークランド大学・織田敬子先生には、高齢者施設における看護師とケアワーカーによる口腔健康介入への多職種連携について、香港大学・Flora Wailing Chan 先生には、香港における高齢者口腔健康の推進活動について、そして国際交流委員会・岩崎正則先生には、アジアにおけるオーラルフレイル予防普及に関する活動について論じていただき、今後の展開を討議する。

委員会企画シンポジウム 4

AI と DX が切り開くビッグデータ時代の歯科医療

座長：有川量崇（日本大学松戸歯学部衛生学講座）

植野正之（埼玉県立大学保健医療福祉学部健康開発学科）



近年のさまざまなデジタル技術の革新に伴う人工知能（AI）、デジタルトランスフォーメーション（DX）は、保健医療分野においても大きな“伸びしろ”となることが期待できます。実際に、これらのテクノロジーにより、レセプト情報・特定健診等情報データベース（NDB）をはじめとするビッグデータの解析もより取り組みやすくなっています。本学会員による大規模コホート研究の報告も増え、歯科界の疫学研究にも大きな進展をもたらしつつあります。

本シンポジウムでは、行政、アカデミアから4人のシンポジストにご登壇いただきます。これらのテクノロジーが歯科保健や疫学研究にどのように活用されているか、具体的にお話いただき、現在のビッグデータ解析の課題について考えていきたいと思っています。

まず、小椋正之先生には、厚生労働省の立場から、わが国のDXを取り巻く政策の方向性、課題についてお話しいただきます。続いて、さまざまなアプローチでビッグデータ解析により多くの重要な成果を上げている植野正之、竹内研時、恒石美登里の各先生に、それぞれの専門分野における研究を紹介していただく予定です。

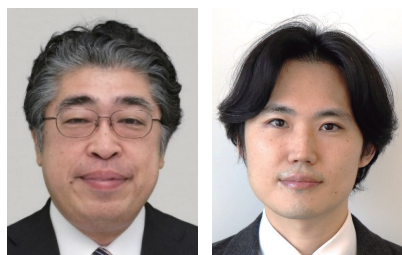
本シンポジウムを通じて、歯科医療にこれらのテクノロジーをより一層役立てるために、将来、何が必要となるのか、その展望とともに議論を交わす場にしたいと考えています。

委員会企画シンポジウム 5

歯科口腔保健の推進に関する基本的事項（第2次）をどう見るか —政策科学の観点から—

座長：深井穂博（深井保健科学研究所／地域口腔保健委員会）

竹内研時（東北大学大学院歯学研究科／地域口腔保健委員会）



本シンポジウムは、令和6年度から「歯科口腔保健の推進に関する基本的事項（第2次）」（以下、歯・口腔の健康づくりプラン）が開始されることを機に、国・地方公共団体・アカデミア・歯科医師会といった異なる立場の先生方から、「歯・口腔の健康づくりプラン」をどう解釈し、どう地域口腔保健の施策に反映させていくべきか、その考えを述べていただきます。

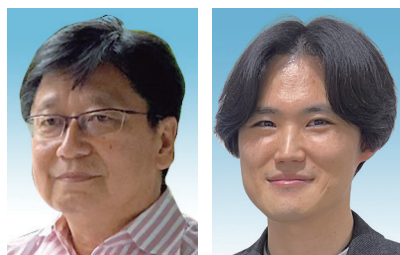
厚生労働省の立場から和田康志先生には、「歯・口腔の健康づくりプラン」の概説と目指すゴールをお示しいただき、地方公共団体の立場から田所大典先生には、基本的事項の全部改正を受けて自治体の口腔の健康づくり計画がどう改正されるのか、その体験をお話いただき、アカデミアの立場から草間太郎先生には、歯科口腔保健に寄与する公衆衛生的アプローチについて、ライフステージ別に整理いただき、歯科医師会の立場から山本秀樹先生には、「歯・口腔の健康づくりプラン」内のロジックモデルに対する日本歯科医師会が考える対応を、大黒英貴先生には地域の歯科医師会に求められる働きと地方自治体との役割分担のあり方等を発言いただく予定です。

当日フロアにご参集いただく皆様が、生涯にわたる歯・口腔の健康に関する取組を達成するための政策科学について考え、議論する機会となりますことを願っております。

一般企画シンポジウム 1

基礎・臨床・疫学若手研究者からの令和の健口戦略 —どうするミレニアル世代！？—

座長：片岡宏介（徳島大学大学院医歯薬学研究部）
竹内研時（東北大学大学院歯学研究科）



本シンポジウムは、「口腔衛生学の専門性とは何か」、そして「進取の気風で切り拓く口腔衛生の未来」、「令和の健口戦略：基礎研究からの発信！！」といった近年の大会テーマのもと、当学会特有の基礎・疫学・臨床研究に携わる研究者が集う異分野融合シンポジウムとして開催してまいりました。

昨年は新型コロナウイルス拡大後初の対面シンポジウムとなり、またその夜の飲み会、いや語り合う会では、異なる領域の特に若い研究者同士が参集し、語り合う場となりました。当日のシンポジウムでは多くの学会員（座長席からの目測では、立ち見を含め約 80 名）が聴講してくださり、また夜の部では、14 名もの参加がありました！

今大会のテーマは「健康の伸びしろ」、大いに伸びしろが期待できる若手研究者 6 名による基礎・疫学・臨床研究融合シンポジウムを企画しました。若手研究者のそれぞれの研究領域から考える令和の健口戦略、すなわち将来の夢を異分野の研究者、特に若手の方々にわかりやすく語っていただこうと思います。この際、以前からひっそりと存在している（??）「若手の会」も復活し、学会再興に貢献できればと考えます。

なお、今回も盛岡の街でシンポジストとの語り合う夜の会を企画しています。本学会の若手研究者のご参加をお待ちしております。シンポジウム当日の夜、学会公式懇親会の後を予定しています。詳しい情報はシンポジウム内でお知らせいたします！乞うご期待！

一般企画シンポジウム 2

リサーチクエスチョン（RQ）を探求し論文に繋がる研究をしよう ～アカデミアと病院歯科に所属する歯科衛生士からの発信～

座長：五月女さき子（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科口腔保健学）
船原まどか（九州歯科大学口腔保健学科）



口腔の健康のエビデンスを蓄積していくためには研究が必須です。日々の仕事の中で小さな疑問があるはずですが、それがリサーチクエスチョン（RQ）から論文という成果物に至るのは難しいです。行動に移すに至らない障壁として時間がない、研究のネタがない、資金がない、そもそも研究に興味がないことが考えられます。その一方で限られた時間の中で研究し論文化している歯科衛生士もいます。そこで本シンポジウムでは、「口腔衛生に関わっている歯科衛生士がどのような RQ を考え、方向性を見出し、それをどのようにして解決して研究し、論文作成に至ったのか」という課題を取り上げました。4 名のシンポジストに周術期患者の口腔唾液中細菌数に影響する因子、要介護高齢者の唾液中細菌数に関する知見、口腔中咽頭癌放射線治療患者の口腔粘膜炎とカンジダ発症、口内炎の除痛に関する動物実験について研究内容とともに、①研究を始めたきっかけとなる RQ はどのようにして生まれたのか、②研究する上で困難だったこと、③どのような支援があったのか、④研究後の変化、⑤今後の取り組みなどについて発表していただき、現在の課題についてみなさんと一緒に考えてみたいと思います。

編集後記 広報委員会より

ニュースレター第12号は高柳篤史先生、恒石美登里先生と鴨田が編集担当いたしました。

本号では、来る2024年5月10日より開催予定の第73回日本口腔衛生学会 学術大会の特集号として、大会長の岸 光男先生をはじめ、大会でご講演いただく各シンポジウムの座長の先生方に執筆をお願いいたしました。短い期間にも拘らず早急に原稿をお送り下さり、先生方には大変感謝申し上げます。

コロナ禍の影響で、しばらくの間、学術大会も制限されておりましたが、ようやく盛岡での今大会で通常開催となり、大変嬉しく思います。皆様にお会いするのを心から楽しみにしております。

今年度も、ニュースレターが学会の情報発信の場として、会員の皆様に活用していただけるよう努力してまいりたいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

(鴨田剛司)